石川県における観光現象の地域の構造(昭和60年度卒業論文要旨)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/5304

石川県における観光現象の地域の構造

山　岸　正　治

観光現象における観光主体である人間の流動は，一般の人口流動と比較して，２点間の単純な往復運動ではない，より複雑なものとなることが多いといえるであろう。また，観光事業には，各観光地においてなされる事業は近隣観光地のそれと競争状態にありながら，一方では関連効果を生み出しているという競立性，一定の地域を単位として行われることも多いという地域性などの特性がみられる．さらに，個々の観光地を研究の対象とする場合においても，周辺観光地との関係あるいはそれらから受ける影響を考慮に入れるべきである．こうしたことから，観光現象を研究するにあたっては，従来なされてきたように個別の観光地毎に扱うばかりではなく，一定の領域を一つの観光地域としてとらえ，各観光地はその地域の構成単位として地域のなかで考えるということも必要であるといえよう．そこで本稿では，石川県を一つの観光地域として設定し，主として観光客流動に視点をおいての各観光地の機能や相互関連性の考察から，その観光現象の地域の構造を明らかにすることを試みた．

観光地域の構成単位としての観光地の機能についてみると，まず集客度の点では，多くの入り込み観光客を誇り最大の集客力をもつのは加賀地区である．能登地区がこれに匹敵しており，金沢地区の集客力もさほど見劣りはしない．これに対して白山地区においては，入り込み観光客は少数に留まり，集客力は弱くなっている．

つぎに観光客の宿泊行動と宿泊施設の整備・稼動の状況をもとにして観光地の滞留拠点性についてみた．観光客の宿泊総度数，宿泊施設の総収容量が最も多いのに加え，施設の平均稼動率も比較的高い加賀地区が最大の滞留拠点として機能している．能登地区は宿泊施設の設置に関しては優れているものの，その稼動状況や観光客の宿泊総度数をみると，むしろ金沢地区の方が滞留拠点性は高いといえる．また白山地区は，宿泊総度数，宿泊施設の整備・稼動のいずれも劣っており，滞留拠点としての機能は小さい．

観光地域内における観光客の流動傾向からみた各観光地の相互関連性については，能登地区と金沢地区の間に頻繁な流動があり，両地区は半ば一体化の様相を呈しているといえるほど強く結びついている．これに加え，金沢地区と加賀地区の比較的強い相互関連，加賀地区・金沢地区・能登地区を巡り渡る広域的観光ルートの形成も指摘できる．一方白山地区については，他地区との結びつきは弱くなっており，孤立した存在形態をとっているものと思われる．

このような観光現象の地域の構造に影響を及ぼしていると考えられる事項として，まず観光市場すなわち観光客誘致圏の大きさ，観光需要の年間の時節による変動の程度をあげることができる．大きな市場をもつ方が，多数の観光客を誘致できる上に，宿泊客，周辺観光地をも同時に訪れる客の割合が高くなる傾向にあるからである．また，年間の観光需要の変動が小さいほど，宿泊施設の稼動状況をはじめ，より安定した事業経営が期待できるために施設の整備の面でも優れ，滞留拠点性が高くなると考えられる．ついで，観光地を特色づける観光対象の性格と展開，特に滞留拠点として機能しやすい大規模な温泉地の存在を指摘した．さらに，観光客の行動の意志決定にかかわると思われる宣伝・情報，一つのネットワークとしてとらえた観光地域における各観光地の近接性と高速交通機関へのアクセスの問題をとりあげた．

今後，経済・社会的要素についての詳細な分析を含めて，本稿のような観光現象の地域の構造の解明を目的とする研究を積み重ね，研究の方法を確立させていくことが必要である．